

媽祖を通じた、大間と台湾の交流の記録

大間町観光協会 副会長 島 康子



天妃様行列は、「なんじゃこりゃ！」なお祭り

津軽海峡を挟んで、向こう岸に見えるのは北海道の函館。ここ大間は、本州最北端の町である。今日は函館が見えるねとか見えないねとかが挨拶代わりになる、最短距離は17.5キロ。この人口5000人弱の日本のちっぽけな町が、抜群の知名度を誇っているのは「大間マグロ」というブランド魚のおかげだ。大間の漁師たちが釣り上げるマグロは、毎年年初競りで最高値をたたき出し、今年も1億1424万円で競り落とされた。ちなみにこれまでの記録は、2019年の豊洲市場での3億3360万円。世の中の度肝を抜くような値段とともに、その海からの授かり物を仕留める漁師たちの生きざまにも注目が集まり、ドキュメント番組などが放送されるのも年末年始の恒例。メディアに登場する漁師たちの人気ぶりは、もはや下手な芸能人を超えているのではないかと感じる。

「板子一枚、下は地獄」とはよく言ったもので、命の危険と隣り合わせでマグロと対峙している漁

師たちは信心深く、神様をほんとうに大事にしている。この漁師町・大間では、1年を通じて折々に大漁祈願、海上安全の神事があるが、「海の日」に行われる神事がなんとも独特。それが「天妃様（てんぴさま）行列」だ。

海の日朝、まず執り行われるのは「大漁祈願祭」。大間稲荷神社での祈禱を済ませた後、神様に選ばれた御召船（おめしせん）など大漁旗で着飾った12隻の漁船が大間港を旋回。その後、沖合に出て、海中に大漁祈願、海上安全のお札を沈める「お札入れ（おふだいれ）」が行われる。神事を済ませ役船（やくぶね）と呼ばれるその12隻が港に戻ってきて神楽の舞の奉納などが終わると、いよいよ天妃様行列の始まりだ。大間稲荷神社前の広場に、「天妃様」と我々が呼んでいる海の女神様の神輿が登場し、その天妃様を守る個性的な神々が勢揃い。地元の中高生たちも龍踊りや銅鑼係で参加する。先導するのは、日本ならではの神楽の神輿とお囃子で、その後に爆竹を打ち鳴らしながら銅鑼の音とともに色鮮やかな衣装の神々や龍踊部隊、そして天妃様のお神輿が続き町内を練り歩く。台湾のみなさんが見ると「なんと厳粛な」、日本人が見ると「なんじゃこりゃ！」と目を丸くする、大間独特なお祭りの風景なのだ。

由来：なぜ大陸の神様が？

天妃様は、中国沿海部や台湾、東南アジアを中心に、航海・漁業の守護神として信仰を集めている道教の女神様。媽祖（マーズー）と呼ばれ、実に20ヶ国以上の国に約2億人以上の信者がいると言われている。2009年には「媽祖信仰」がユネスコの無形文化遺産にもなったほどだ。



2つの文化が融合した天妃様行列



大間稲荷大権現

「大間町史」に掲載されているご神体の写真

媽祖様は実在していた女性で、960年、中国福建省の湄州（びしゅう）島生まれ。幼少の頃からすでに聡明で、16歳から人間離れした力を発揮するようになり、21歳の時には人々を飢餓から救った。そして28歳になった時、泣いて引き止める家人に別れを告げ、「人々を救わん」と海上を歩いて神になり、台湾海峡でたびたび起こる海難事故でも人々を救い奇跡を起こしたという。中国沿海部と台湾にあるおびただしい数の媽祖廟は、人々がいかに媽祖様を崇拝してきたかを物語っている。日本の媽祖廟は沖縄、九州に集中しており、東日本は神奈川、茨城、そして東北地方は大間にだけ祀られている。

そもそも、なぜこの日本の本州最北端の町に、大陸由来の神様が祀られているのか。それは実に、1696年（元禄9年）の江戸時代に遡る。当時の名主であった伊藤五左衛門が、水戸藩那珂湊より遷座したという説が有力で、その後1883年（明治16年）、大間稲荷神社に合祀された。伊藤五左衛門は海運業に携っていた人物で、薩摩の出身だったと言われている。大間町史によれば、この時代、干鮑など海産物を満載した大間の漁船は、津軽海峡を越えて那珂湊で一部の陸揚げを行い、長崎から清国へと輸出していた。その航海中、海上での危難を助けてもらった神徳を崇め、遷座したものと伝承されている。

木製で高さ20センチほどのその像は、大間稲荷神社の奥の院に祀られていて、日本の習わしにより一般人が目にすることはできない。一般に公開されたのは、それから実に300年の後のこと。

媽祖の遷座300年の記念祭に

ここに黄色くなってしまった新聞の切り抜きがある。「神々しい女神 300年ぶりに公開—大間・稲荷神社」という見出しが躍っている。遷座から300年後の1996年7月21日に、大間稲荷神社の奥の院に祀られてきた天妃像が、初めて一般公開されたことを報じる記事だ。さらにこの日、「台湾・雲林県の北港朝天宮の信者ら約百二十人も来町。新たに別の天妃像を贈るとともに記念パレードに参加した」とある。大間で初めての天妃様行列が実現したのが、まさにこの日。北港朝天宮から新たな媽祖像の分霊を受け、行列に必要な祭典用具のほとんどを寄贈してもらったという。大間の町に突如として、前代未聞のお祭りが出現した！

この300年記念祭に至るまでの経緯を知る資料は残されていないのだが、当時の大間町観光協会長の犬見光男氏と副会長であった米沢菊市氏が中



祭典用具のほとんどは北港朝天宮からの寄贈（1996年）

心となって、北港朝天宮との関係性を築いてきたものと思われる。先人たちの熱意が切り拓いた、ここが媽祖を通じた台湾との交流の起点であった。はからずも、「海の日」が国民の祝日になったのもこの年で、その翌年の1997年には、大間稲荷神社が北港朝天宮と姉妹宮を締結し、毎年海の日に天妃様行列を行うことに。大間稲荷神社本殿の横に「天妃神拝殿」も設置され、北港朝天宮から分霊を受けた媽祖様が守護神とともに祀られることとなった。さらに、記録がしっかり残っていることもある。1960年代から不漁が続く80年代には漁獲ゼロにまで落ち込んでいた大間のマグロ漁が、この300年祭の年を境に豊漁へと一転。それはまさに、天妃様のご加護であると関係者は信じている。



町をあげての遷座300年記念祭（1996年）

その後も毎年、北港朝天宮の役員や国内の媽祖関係者を招いては、天妃様行列を挙げてきたものの、交流の扉を開いてきた先達たちが次第に高齢化。合わせて、この祭りは大間稲荷神社、大間漁業協同組合、大間町観光協会という3団体が共同で挙げており、大間町商工会青年部の若者たちや龍踊りを披露する中学生も担い手となっているため、関係者の調整も一苦労。毎年、最低限の担い手をかき集めてなんとか行列を続けている状況に陥った。

風向きが変わってきたのは日本政府が、訪日外国人旅行者を倍増させるぞと鼻息荒くなってきた2016年。観光関係者の間ではにわかに「インバウンド」という言葉が飛び交う。この本州最北端の大間にも、外国人客は呼び込めるのか？呼べる

べさ。いや、呼ばねばならぬ！そんな事情が大間町にはあった。

大間—函館のフェリー航路を守りたい

津軽海峡を挟んだ北海道側の函館と大間は、フェリー航路で結ばれている。函館から90分の快適な船の旅で訪れることができる周遊観光エリアだと言える。そもそも海に開かれた大間の住民にとっての函館は生活圏であり、高齢者にとっては通院先。陸を見れば、青森市まで優に3時間かかるのが、この本州最北端。だから、病院通いの高齢者を支えるフェリー航路は、命をつなぐ「海の一本道」なのだ。しかしながら人口減少が顕著になっている中、生活航路としての利用で航路を維持していくのはもはや限界であり、函館—大間航路は赤字にあえいでいる。なんとしても観光需要を生み出し、航路を支えていかねばならない。



大間町は函館市の周遊観光エリア

目の前には、大観光地である函館がある。台湾人観光客にも人気で毎日定期便が飛び、年間の宿泊客だけで20万人は訪れていたと記憶している。「その1割でも、いや1%でもフェリーに乗って大間に来てくれないだろうか。いや、なんとかしたい！」という意識が芽生えた。



フェリー客を歓迎する旗振りが行われることも

その後、町と観光協会は一体となって台湾のみなさんにラブコールを送る。2017年から台北で毎年開催されている東北地方のPRイベント「東北遊楽日」に、青森県とともに出展。東日本大震災への台湾からの支援に感謝を伝える気持ちから始まったこのイベントの場で、多くの台湾のみなさんに向けて思いを伝え、直接触れ合った。翌年には大間高校の生徒も同行し、必死で勉強した中国語でプレゼンテーションしたりPR活動を行った。そんな矢先、大間と台湾の架け橋となっていた大見光男観光協会会長が亡くなってしまったのだが、300年記念祭に至る父親の思いと、台湾の方々とのご縁と友情の重みを感じて、息子である大見義紀氏が新会長の任を引き受けてくれた。これで繋がった！

以降、大間町観光協会は大見義紀新会長を先頭に、PRイベントに旅行会社との商談会にと積極的に動いていった。大間高校生とともに出向いた「東北遊楽日」の場で、IKU老師という人気ユーチューバーとの出会いもあった。彼は台北在住の日本人で、台湾の方向けに日本の魅力を紹介する番組の配信をしている。まさに、台湾と日本の架け橋となっている人物である。大間から高校生自らが台湾にやってきて、ふるさとを懸命にPRする姿に心を打たれ、我々の応援団になってくれたのだ。さらに大見新会長は、媽祖の総本山である北港朝天宮との関係性を改めて結び直すために奔走。2019年の天妃様行列に、北港から媽祖参拝ツアーを組んで来てくださるよう働きかけ準備が進んでいたが、エバー航空のストライキにぶつ

かってしまい断念。それでも青森県と連携して、台湾から旅行会社2社を招聘した現地視察ツアーを実施し、ツアー造成を促した。大間町はこの年から、「地域おこし協力隊」という制度を活用して、弘前大学の博士課程で学んでいる許文茜さんを採用。彼女のおかげで台湾向けのプロモーションや旅行会社との商談、交流事業の企画などが、ものすごいスピードで動いていった。さあ、ガンガン進んでいくぞー！

となった矢先、どうなったかはみなさんご承知の通りで、いわゆるコロナ禍によって、活動休止。天妃様行列を実施することもできない、空白の3年間。一方で大見会長は、北港朝天宮の役員のみなさんらとやりとりする中で、本格的な交流を進めていくためには「天妃様をとにかく里帰りさせるしかない！」という思いに至ったのだった。北港朝天宮から何度も里帰りのお誘いいただいていると。

北港朝天宮から分霊された媽祖像を里帰りさせる巡礼は「北港進香」と呼ばれ、2024年2月、台湾の「重要民俗（日本の重要無形民俗文化財に相当）」に指定されたほど。姉妹宮である大間稲荷神社との絆を証明するためにも、実に重要な習わしであることを、我々は後に噛みしめることになる。北港朝天宮を訪れる「進香」団体は年間3000を超え、その参加者は数百人に上るという（朝天宮の統計による）。

天妃様、里帰りを果たす

コロナ禍がようやくおさまりつつあった2022年。国からの調査事業の助成を活かして、東京媽祖廟を視察、訪問。まずは日本国内で媽祖関係者とのつながりを深めて、2023年度に助成金を申請するなどの準備を進め2024年度にいよいよ決行するべし！という計画だったが1年早く町が「台湾との交流促進事業」を予算化して、ぐっと背中を押す。これはもう媽祖様のお導きに他ならない。やるなら今だと準備をスタートし飛行機のチケットが取れた年度末ギリギリの今年の3月16日が決行日となった。

天妃様の里帰り交流団は、行列の担い手となっている4つの団体の9人。目時浩美宮司を始めと



28年目にして2800キロの里帰り

する大間稲荷神社、大間地区、大間町商工会青年部、そして我々大間町観光協会。

北港朝天宮から大間に媽祖像が分霊されてから28年目にして、2800kmの道のりとなった里帰り巡礼の旅である。交流団は3月14日、大間港からフェリーに乗って出発。迎えた3月16日当日は、桃園のホテルで東京媽祖廟から応援に来てくれた4人と合流し、専用バスで北港へ向かう。土曜日のハイウェイは尋常でない混みようで、混んでいるから3時間はかかるだろうと見込んでいたはずが、なんと4時間もかかった。指定の駐車場に到着すると、他の団体のものと思われるバスが10台以上も停まっている！ひっきりなしに巡礼団が訪れていることが伺える。すでにそこにはエ



北港朝天宮への里帰りを果たす（2024年）



新しい衣装と髪飾りで艶やかに（北港朝天宮提供）

ネルギーが充満していた。待ってましたーと言わんばかりに、北港朝天宮のみなさんが私たちのための歓迎の行列を準備万端整えてくれていて、天妃様が専用の神輿に乗せられた。独特の音楽と嵐のような爆竹の渦、我々を取り囲むものすごい熱量に圧倒されながら、蔡咏錫会長ら役員のみなさんとともに参道を行進。商工会青年部の若者2人にはサプライズも。媽祖様の守護神である順風耳、千里眼の中に入ることになり、汗びっしょびしょでがんばった。

かくして、教えてもらった「進喔！（じんごーう！）」「進喔！」の掛け声を高らかに上げながら、我々は宮入を果たしたのだった。大間からフェリーに乗った時には、どこか不安そうなお顔に見えた天妃様。北港朝天宮の祭壇に飾られ、新しい髪飾りと衣装を与えられた瞬間、いっそう美しく艶やかに自信に満ちたお顔に。「もっと早く連れて来ればよかった」と胸が一杯になった。記念品の取り交わしや昼食会を含めて、厚いおもてなしに感動しっぱなし。天妃様が、台湾と大間のご縁を固く結び直してくれたのだ。北港での一部始終は、IKU老師が張り付きで取材してYouTube番組として配信してくれたが、報道もすごかった。北港朝天宮からメディアリリースしてもらったおかげで、台湾最大の新聞社である自由時報を始め、テレビやネットニュースでも、日本の大間からの北港進香を、こぞって取り上げてくれた。

展望—天妃様が交流のシンボルに

約1ヶ月後、「天妃様の台湾里帰り報告とおひろめ会」と題して、町の人たちと報道機関向けに

報告会を開催。動画でなんとか臨場感を伝えながら、いっそう美しく艶やかになった天妃様を広くお披露目させてもらった。28年目にして初めて実現したこの里帰り巡礼で、媽祖を通じた台湾と大間の本格的な交流の扉が開かれた、天妃様が交流の扉を開いてくれたと誰もが感じたと思う。

里帰り交流団に加わっていた商工会青年部では、旅費を積み立てして、定期的にみんなで北港朝天宮に行こうと盛り上がっている。青年部だけではなく、交流のチャンネルを広げたい。大間の中高生にも交流大使になってもらい、台湾との中高生交流へとつなげていけないものか。そして媽祖交流を深めた台湾の地域から、大間・下北半島への教育旅行を誘致することにもつなげていきたい。

函館からフェリーで90分のこの大間町が、いずれ媽祖の参拝場所の1つとして認知され、媽祖関係者のインセンティブツアーなどの定番コースになることを目指したい。これを書いている今、今年の天妃様行列に、北港朝天宮の蔡咏鐸会長を始め30人あまりの方々が函館からのフェリールートで来てくれることが決まり、こりゃ大変だー！とうれしい悲鳴を上げている。感動に溢れたおもてなしのお返しをせねばならない。互いの2つの文化が解け合った天妃様行列が、唯一無二

の交流の象徴。このかけがえのない文化資源である天妃様行列を、持続可能なものにしていかねばならない。そのためには、行列の担い手の中核となり交流を進めていく母体、「大間媽祖会」とも言うべき団体が必要だという声が上がっている。さらに、独自の媽祖信仰文化と交流のシンボルとなる天妃廟の建立も、視野に入れていく。

「進喔！（じんごーう！）。宮入の際のこの掛け声は、「さあ、進もう！」という意味だと言う。今や我々の合言葉になってしまった。「進喔！」「進喔！」天妃様が扉を開けてくれた！さあ、進もう！進もうー！



大間稲荷神社にて「進喔ー！」